



「見通し・行動・振り返り」の繰り返しながる 生徒自身の幸せな未来創造へとつながる

OECDが2019年に公表した「OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」のなかでも、「リフレクション」というキーワードが出てきます。どのようなものとして位置づけられているのか、OECD Education 2030における議論に参加し、ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)の訳出においても中心的な役割を担った、東京大学大学院の秋田喜代美先生に伺いました。



東京大学大学院
教育学研究科長・
教育学部長
秋田喜代美

あきた・きよみ ●大阪府生まれ。東京大学文学部卒業後、銀行員、専業主婦を経て東京大学教育学部に学士入学。同大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。専門は発達心理学、教育心理学、保育学、学校教育学。立教大学文学部助教授を経て、2004年東京大学大学院教育学研究科教授。19年に東京大学初の女性学部長、研究科長に就任。OECDの協力の下に生まれた産学コンソーシアム「日本イノベーション教育ネットワーク」の研究統括責任者も務める。

リフレクションは、生徒に必要な 資質・能力を育成するプロセス

OECDでは、2015年からEducation 2030プロジェクトを進め、「2030年に望まれる社会のビジョン」ならびに「そのビジョンを実現する主体として求められる生徒像とコンピテンシー(資質・能力)」を追究してきました。このプロジェクトの第1フェーズの最終報告書として公表されたのが、「OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」(図1)です。

ラーニング・コンパスとは、生徒が主体的・自律的に物事に取り組む姿勢、つまりエージェンシーをもって、望む未来(社会のウェルビーイング)へと進むための「羅針盤」を意味します。そこでは、

「学びの中核的な基盤(知識、スキル、態度・価値)」、それを基に育成される「より良い未来の創造に向けた変革を起すコンピテンシー(新たな価値を創造する力、責任ある行動をとる力、対立やジレンマに対処する力)」が生徒に求められるとされています。そして、これらの資質・能力を育成するために必要なプロセスとして、リフレクションを含む「AAR(Anticipation・Action・Reflection)サイクル」が提唱されています。

見通し・行動・振り返りにより 生徒の学びに向かう力が育つ

AARサイクルとは、学びにおいてAnticipation(見通し)、Action(行動)、Reflection(振り返り)を繰り返

すことを意味し、「学習者が継続的に自らの思考を改善し、集団のウェルビーイングに向かつて意図的に、また責任をもって行動するための反復的な学習プロセス」であると解説されています。

これをすればどうなるだろうかという予測・予想を立て、実際にアクションを起す。自らの取組・経験を振り返り、そこで得た気づきや学びをまた次の予測・予想やアクションにつなげていく。Education 2030プロジェクトの概念が盛り込まれている新学習指導要領の言葉を使って表現すると、このサイクルを継続的に繰り返すなかで、学びがより深まり、これからの時代を生きるうえで必要な資質・能力が身につく、主体性や学びに向かう力が養われ、より良い未来の創造に向かうよう

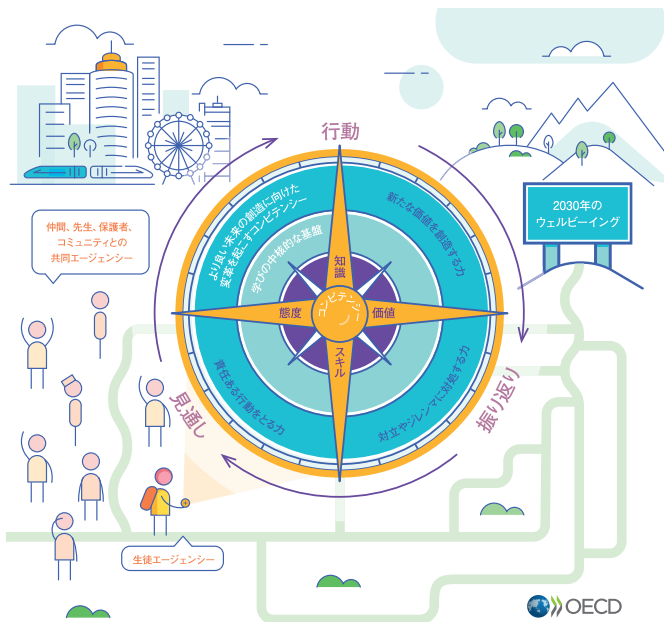
自分にとつての意味を深め、 社会とのつながりへと広げる

AARサイクルにおいてまず大事なのが、「行動」の原動力となる「見通し」です。日々の学びにおいては、課題設定と強く結びつくプロセスです。ここで重要なのが、英語のAnticipation(見通し)には「ワクワクする」というニュアンスが含まれることです。知的で論理的、理性的な「予想・予測」という理解にとどまらず、未知の世界と出会うたり新しいことに挑戦したりするときのワクワク感のような、学びへの動機づけになる「予感」や「期待」も含めて理解すると、課題設定のヒントにもなるのではないかと思います。

になる……ということになるでしょう。



図1: OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030



※OECD発表の図版・仮訳をもとに編集部で作成

「続く「行動」の後の「振り返り」もまた、AARサイクルを回し続ける、つまり、知的好奇心をもち主体的に学び続けるうえで不可欠なものです。ここでいう「振り返り」とは、単なる反省ではなく、何がどれだけできた・できなかったかという外的な基準による評価でもありません。AARサイクルの定義づけにもその研究が引用されているジョン・デューイは、リフレクションについて「自分が考え取り組んだ課題に対して、自分はどうかだったかを振

り返り、批判的に探究すること。継続的に、思慮深く注意深く考えること」と述べています。自分が取り組んだ課題や学び方は自分にとってどういう意味をもっていたのか、なぜうまくいった・いかなかったのか、次はどうすればよいか…と、具体的に深めるのがリフレクションなのです。また、ラーニング・コンパスでは、個人のエンジェンシーと同時に周囲の人々と協働して発揮する「共同エンジェンシー」を重視しており、「振り返り」に

おいても、他者と共に学びを振り返る、対話をしながら振り返る、という視点が大事になります。自分にとってどうだったかだけでなく、他者からフィードバックを受けることで、自分の経験や学び、発見が他の人にもどういう意味や影響を与えたのか、さら

には社会や学問、未来とどうつながっているのかというところまで広がっていく。こうして縦にも横にも広がりが生まれることで、学ぶ面白さや納得感、意義や価値が見えてくるのです。「見通し」によりワクワク感が、「行動」により達成感が得られ、「振り返り」により自己効力感が生まれ、次なる学び(行動)への動機や意欲、やり抜く力やレジリエンス、さらには「どういう目的で何をどう学ぶか」を自分で決める自己調整力が育まれる。AARサイクルを通して、先に述べたコンピテンシーに加え、社会情動的スキルも育成されると考えています。

幸せな未来に向けて、生徒が自分の物語を紡ぐ活動に

近年は、高校の学びにおいても振り返りシートなどが用いられるシーンが多く見られるようになりました。生徒の学びの履歴をポートフォリオに残す動きも進んでいます。先述したように、リフレクションは自己完結せず、他者へ、社会へと広がっていくことが重要であり、そのためには対話による振り返りが不可欠です。なかには自身で振り返るのが難しい生徒もいます。特に書くことが苦手な生徒に対しては、

対話から始めることが大切であり有効です。教師や仲間からの働きかけが、生徒の振り返りをより豊かにするのです。大事なのは、リスペクトとエンジョイメント。先生方には、「これいいね」「こういう視点はほかにないね」と生徒一人ひとりを尊重し、学ぶ楽しさや手応えを感じられるような支援をしていただきたいと思っています。

リフレクションは生徒の主体的で深い学びに不可欠なプロセスですが、これが目的化してしまつては本末転倒です。大事なのは、生徒の幸せな未来、ウェルビーイングのためのリフレクションであること。何が重要なのかという本質的な問いと向き合い、振り返り、生徒自身が自分の物語を紡ぐサイクルを自ら回していけるようになることが最終的な目標です。その過程においては、生徒と教師との共同エンジェンシーが不可欠です。生徒の学びの変化に伴い、教師に求められるものも変わります。OECDのEducation 2030プロジェクトでは、第2フェーズとして、教師に向けたティーチング・コンパスの検討を進めています。先生方にもぜひ、自分たちがどう生徒に働きかければよいか、リフレクションを大切にして深めていただきたいと思っています。